中学校の授業と子ども

小林　朗

中学校の各教科の授業で気になる二つの風景がある。一つは授業で何か取組むことを中学生に教師が指示すると必ず「先生、内申書に関係しますか？」という声が聞こえてくる。この質問が教室の中で一人二人でないことにも教師の背筋を寒くさせている風景である。

もう一つは授業中に眠る生徒が多くなっている風景である。入学したばかりの一年生から睡眠を決めている生徒が少なくない。

一、生徒が二極分解する授業

教育学者の佐藤学氏が「学びからの逃避」と子どもの授業への態度を酷評してから久しい。しかし、新学習指導要領の実施とともに学習に夢中になる中学生と習をあきらめる中学生は明白に二分化した状況がある。このことは小学校の低学年から棲み分けが始まっているとの指摘を裏付ける。

そして学習に精を出す中学生たちも高校入試、大学入試といった進路の出口のために必死であり、本来の教科への根本的なおもしろさ、わかる喜びから学習していることが少ない。彼らにはテストの点数をいかに上げるかが焦眉の課題である。

新学習指導要領は従来の十年を待たずして、二年で改訂という憂き目にあった珍しいものであるが、最初の導入時は「ゆとり教育」をうたった。そのために教科教育が小中学校ともにおろそかになってしまった。これが「低学力論争」までにつながった。わたしの勤

務している中学校学区にある小学校では「算数で二桁の筆算ができない、通分ができない子どもが中学校に入学しますのでよろしく」といった申し送りが来ている。

この二つの傾向をもっとミクロで見てみると「親の教育への執着」がある。

言い換えれば、親が子どもに対して大学進学を要望しているかどうかが試金石になっている。通塾への過熱はここに要因があるといえる。

極論をあえてすれば、親の経済力がいかにあるかでダブルスクール（学校と塾）が可能になる。学校での学習へのドロップアウト（脱落）を阻止できるかどうかは、家庭教師、学習塾にかかっていると保護者には固定観念のようになっている。

この傾向は高校入試を通過した県内の高校を三分類化させている。一つ目の高校パターンは俗に言われる「進学校」である。ことさら大学進学に熱をあげる。一日七ないし八時間授業を行っている。二つ目は高校生の特技を生かしたパターンの高校である。スポーツ推薦などが一番よい例である。これは学校全体というより、その高校の一要素を担っているといえる。三つ目の高校のパターンは「生徒指導」を強調する高校である。生活ルールを厳しくしてゆくタイプの高校になっている。

これらは小中学校での生徒の授業への二極分解の結果といえる。

二、授業研究の光と影

昨今、県内の小中学校で公開授業が流行している。各学校の校長さんも公開授業をさかんに進める。これは教師間だけでなく保護者間、地域間に公開してゆくのが特徴である。それと連動して「授業時数」の確保の大合唱が校長から叫ばれている。

その主たる推進の理由は「学力向上」という大義名分である。

新潟市で言えば、市教育委員会が採用している学力テスト「全国標準教研式学力検査」（ＮＲＴ）の偏差値が各学校で何点か、と全国の平均点との比較を問題にしている。テスト内容では大領域、中領域、小領域で分けて全国の通過率と市と各学校の通過率を比べている。少しでも高得点にさせるためにどのような授業をしてゆくかが公開授業の課題になっている。（※）

絶対評価になって各教科担当の教師の授業を評価基準で測って実践することになる。子どもがその基準を

六〇%以上達成して、B評定になることが重要になってくる。指導と評価の一体化をうたっているので二〇%以下の達成率でC評定をつけることは教師にとっても首をしめる。教師の指導が問われるのである。

絶対評価と高校入試とのギャップは否めない。高校受験が求めている学力は絶対評価そのものの学力とまるで違うものといえる。

中学教師は絶対評価と高校入試の二つの相違する学力を向上させる困難に立ち向かってゆくといった受難に遭遇している。結局はどの教科もいかに教科書通りに授業を進めるかが問題になっている。そのための授業方法、板書の仕方、設問の仕方などが担当教師のクリアする最大の鍵になってくる。

そして、このような公開授業に取組む中学校が「子どもの実態」から離反しているために学校の「荒れ」が大きくなっていることは県内のいくつかの例を見れば実証されていることがわかる。

このことは「教材論」と「子ども論」を結ぶ授業論にはほど遠い。

中学生は教科書通りに授業を展開しないと苦情を言ってくる。しかし、教科書にあることを膨らませて授業を組織すると高校入試に到底出題されない教材でも大変食らいついてくるのが現代の中学生である。

いくつかの例を紹介したい。

国語は新学習指導要領で「読む」こと以上に「話す」ことが強調されている。そのために、討論ゲームを行う。「男と女のどちらが得か?」といった日常性があるテーマで答えがないものを話し合わせるのである。中学生はこの討論を積極的に行なってゆく。中学生は討論好きである。

私は社会科の歴史学習で討論授業を意図的に近年実践している。授業時数の関係で何時間も討論授業をすることはできないが、原始古代、中世、近世、近現代に一つの討論授業を組織することにしている。

今年度も近世史単元で天明の大噴火を取り上げた。この大噴火で鎌原村は大きな被害を受けた。死者四七七人、村民九三人しか生存しなかった。その残った人々で新しい家族を再編成するという世界の歴史上でも珍しい復興策を江戸幕府は実行した。この新しい家族づくりについて中学二年生について討論させる。「なぜ新しい家族を鎌原村の人々はつくったのか?」のテーマで子どもに仮説を四つ作らせて話し合いをさせる。家族説、村復興説、年貢説、一揆説が子どもからそれぞれ出て討論する。子どもたちは「討論できることが

楽しい」と感想に書いてくる。このテーマも解答（正解）がないのが味噌といえる。

中学生はやはり思考し、自分の意見を言うことが大好きである。また同じ学級でも隣席の子どもが何を思っているのかもわからない場合が多い。意見を表明する場を設定することによって、お互いに交流できることが討論授業の醍醐味といえる。

教材研究は教師が興味関心を持って行なうのが第一段階である。そして、それを子どもに導入の段階に問題提起して提示してゆくと一人歩きし、子どもが教師の枠を乗り越えてゆく授業展開になるのである。

授業研究の光と影は教師ー子どもが同じ共同体という授業で、双方が主体となって交流できるかどうかにかかっている。いつまでも教える側と教えられる側に固定されていては真の授業改革にはつながらないといえる。

三、教師のゆとり

中学校教師の本来の仕事は「授業づくり」である。そのために、いかに教材研究の時間をかけられるかが問われている。

しかしながら、その仕事が一番中学校でおろそかになっていると思えるのは私だけだろうか。教材研究ができないことが外国の教育状況と比較すると日本の場合には最大のネックといえる。

現在、県内の中学校ではまずは「生徒指導」が最大の困難さを教師に与えている。時間だけでなく、精神的にも負担をかけていることは間違いない。

先述した「子どもの授業の二極分解」で授業をあきらめている子どもたちが生徒指導上、問題を抱えているのは中学教師の常識である。学力問題は中学校にとって大きな課題になっている。

そしてその次が部活動指導といえる。教師が時間を沢山費やすことになる。

三番目に教師にとって学校事務が案外重荷になっている現実がある。ここでは詳細を避けるが、教育委員会の各種の調査への回答だけでも大変といえる。

この三つに加えて、新学習指導要領の実施で教育計画作成、評価基準と評価基準づくりに終始した一年であった。このためにある中学校では教師が深夜零時すぎにならないと一週間も帰れず、バタバタと倒れた実態があった。

県教育委員会は二〇〇二年度、小中高校で「精神疾患」になった教員が五十五人いたと報告している。

中学教師が授業づくりに正面から取組める時間的な保障がないのである。

また、教科授業の時数が少なくなった分、総合的な学習と選択授業の授業時数が多くなった。このことが中学校教師には大きな負担になっていることを最後に述べたい。中学教師の会話で「総合的な学習と選択授業がなくなるのが一番よい」という意見が多い。この二つの授業が教科授業と次元を異にしていることがその要因である。特に総合的な学習は中学校では教科の枠があるためになかなかうまくいかない。この問題も中学教師にとってストレスになっている。

「授業づくり」の仕事は遠い道のりである。

※　県中学校研究協議会では来年度の秋、県内一斉に学力テストを五教科で一・二年で実施することを発表した。

（こばやし　あきら・新潟市中学校教員）